

6月抗争記念地ガイド

6月抗争を歩きながらコロッケを食べる

かつて「南営洞^{ナムヨン}対共分室」として使われた建物、警察庁人権保護センター。ソウル地下鉄1号線の南営駅のプラットフォームからすぐ見える。

旅行のように遊びながら、休みながら訪ねる1987年6月民主抗争記念地……ソウル南営洞の対共分室からイ・ハニョル記念館までの半日コース

ソウル地下鉄1号線の南営駅のプラットフォーム。下り線のスクリーンドアの向こう側に灰色に光る建物がニョッキリと首を出している。龍山^{ヨンサン}駅とソウル駅を前後から眺めるこの建物は、「南営洞対共分室」と呼ばれた。故キム・グンテ議員など、民主化運動家が連行されて苦難に遭った、悪名高い場所だ。「そんな建物がこんなところにあるとは……」。建物は威風堂々と大通りに面して建っている。南営駅1番出口から出て、ロッテリアの社屋とホテルゾーンを過ぎて、200歩も歩けば着く距離だ。地図も必要ない。

パク・ジョンチョル拷問致死事件の秘密を明らかにした明洞^{ミョンドン}聖堂

6月抗争30周年を迎え、熱かったあの年の夏の韓国現代史も勉強し、ソウル市内の隠れた名所を訪ねてはどうだろうか。週刊「ハンギョレ21」は、あの残酷で熱かった30年前の歴史の現場を半日で見て回れるように、「6月抗争記念地ガイド」を準備した。ツアーの途中途中に立ち寄る価値ある「美味しい店」の紹介はおまけだ。

抗争の火種が始まったところを出発点としよう。現在は警察庁人権保護センターに変身した南営洞対共分室は、ソウル大学生のパク・ジョンチョルが1987年1月14日に連行され、電気拷問・水拷問を受けて亡くなった場所だ。当時、全斗煥政権は「ポンと叩いたらウツと言って倒れた」という創意性のまるでない弁解をして、寝ていた国民の鼻毛を抜いた。死を哀悼する追慕の波は6月抗争の導火線になった。

建物の5階には、活動家を連行してきて拷問した調査室が、鳥小屋のように並んでいる。ドアを1枚ずつ開けるたびに恐怖に震える悲鳴が聞こえるようだ。部屋毎に極めて粗末な便器と浴槽が置かれている。唯一、パク・ジョンチョルの遺影が飾られた調査室だけは清潔だ。それが却って背筋を寒くさせる。

この建物は、当代最高の建築家として賛辞されたキム・スグン(1931～86)が設計した。この建物の最大の特徴は内部構成にある。廊下を間に挟んで、両側に配置された16の調査室は、向かい合う部屋の入口が交錯するように配置されている。同時にドアが開いても、向い側で調査されている人が誰なのか、またそこで何が行われているのかが分からない。調査室内で行われる「拷問」を念頭に置いたようなこの建物の内部構造は、建築家の「社会的責任」について重い質問を投げかける。

次に訪ねる訪問地は「民主化の聖地」明洞聖堂だ。歩いて回る前にどうしてもと言うのなら、聖堂付近の「明洞餃子」に立ち寄って、韓国式うどん(カルグクス)に餃子一皿を追加することを薦める。明洞餃子のカルグクスは、やわらかい麺にコクのあるトロリとした肉のスープで有名だ。中が透けるような餃子は肉汁がいっぱいで、どんなに行列ができていても味わう価値がある。

濃いカルグクスの汁のように、30年前の明洞聖堂での民主化の熱気も熱くて溢れんばかりだった。1987年5月18日の夕方、キム・スファン枢機卿の話を皮切りに、光州民主抗争7周年の追悼式が明洞聖堂で行われた。キム・スンファン神父が信者2千人あまりの前で、震える声で「パク・ジョンチョル拷問致死事件の真相が歪曲された」として、この間隠されていた拷問警察官の氏名を一人ずつ呼び上げ、世に知らせた。

明洞聖堂の尖塔は独裁政権を狙い、聖母マリアは闘士たちを保護した。抗争の決定的な分岐点になった6月10日から15日まで、デモ隊は明洞聖堂を盾にして座り込みを行った。キム・スファン枢機卿はデモ隊を逮捕しようとする警察に対し、「私を踏み越え、神父を踏み越え、修道女も踏み越えなければ学生たちには会えないだろう」と脅した。聖堂付近の啓星女子高生たちは、自分たちのご飯を弁当にしてデモ隊に渡した。

抗争指導部「国本」が誕生した香隣教会^{ヒヤンニン}

6月抗争の痕跡を訪ねた後の旅程は、明洞聖堂から100メートルほど離れた香隣教会だ。道すがら明洞名物「明洞コロッケ」を味わって行こう。カリカリな衣と柔らかい中身が合いまって、口の中で民主主義を叫ぶ。野菜味、ジャガイモ味、辛子味、クリームチーズ味など、多様な食欲が尊重される統合の場だ。価格も庶民経済を考慮している。ただし、決まった量だけが売れば店を閉めるので、遅く行くと無駄足になることもある。

香隣教会は小さなロウソクが集まって松明になった場所だ。1987年5月27日、各分野で民主化運動をリードした代表者200人あまりがここに集まって、「民主憲法争国民運

動本部」(国本)を結成した。国本の誕生により、制度圏で活動していた野党、統一民主党と在野勢力が一つの隊列を作ることができた。国本によって個々別々に闘っていた団体が一つになって、6月抗争と直選制改憲を引き出した。

国本の創立場所に香隣教会のような小さな教会が選ばれたのは偶然だった。当時、明洞聖堂や鍾路5街のキリスト教会館のように、活動家が頻繁に訪れていた大きな宗教施設の前には、戦闘警察と私服警察が群れ集まっていた。座り込みを主導する「要注意人物」が一堂に集まれないように、監視の目が光っていた。民主化運動団体は5月27日午前8時という時間だけを決め、場所は決めずにあちこちに散らばり、明洞聖堂の向い側の路地にある香隣教会前が空いているのを見付けて連絡を回し、アッという間に集まった。24時間、明洞聖堂の前を見張っていた情報課の刑事たちは、完全に裏をかかれた。香隣教会の入口には、この日の「奇襲作戦」を賛える記念碑がある。

香隣教会と正反対の側に立っている「南道韓食堂チョンドウンニム」も、知る人ぞ知る美味しい店だ。定食を注文すると、やや酸っぱいカンジャミ(エイの稚魚)の和えものが一皿に山盛りで出てきて、食欲をそそる。メセンイ湯(カプサ青海苔のスープ)と海草を味わい、南道料理らしいなと思った頃に、腰の強い筏橋コマ(灰貝)が酒を呼ぶ。肉厚のハタの蒸し煮や、少し塩辛いカンジャン・ケジャン(カニの醤油漬)から、カッキムチ(カラシ菜のキムチ)まで南道の香りを感じることができる。

闘士が通った美味しい店の傍から抗争が始まる

6月抗争の記念地を辿っていけば、あちこちでソウル都心の隠された美味しい店と出会う。長い歴史を抱いたソウル市内の中心街が座り込みの現場だったおかげだ。実際、朴槿恵、崔順実の拘束を叫んだ光化門のロウソク集会の時も、口は楽しかった。大統領府に行く道が警察の壁で遮られた時も、西村ソチヨンの路地を歩き回って偶然に見つけたうどん屋、憲法裁判所に向けて行進した時も、途中の仁寺洞インサの入り口で立ち寄った海産物とねぎのチヂミ屋……。第13回目の集会ともなると、まったくの常連になった店もあった。豚のプルコギ定食がグツグツ煮える中で、「パククネヌン(朴槿恵は)！」と叫ぶと、マッコリを一杯グツと飲みほして「テジンハラ(退陣しろ)！」と応じた。

食べる楽しみが、集会で棒になった脚と枯れた喉を癒してくれた。崔順実のおかげで10年ぶりに会えた大学の同期、地方から上京してきた親戚のおじさん、食堂の隣の席に座ったピケットを持ったおじさんなど、心の壁が崩れる瞬間があった。

「セシールレストラン」(現在のタルケビの場所)は、6月民主抗争時代に活動家のアジトであった。徳寿宮^{トクス}のそばの聖公会大聖堂^{ソシヨンヘ}の付属の建物に1979年に開店したレストランで、時局宣言と記者会見が絶えなかった。政府がむやみに侵入できない宗教施設と連結しているため、1987年当時には、国本の人たちもここでしょっちゅう集まった。ハンバーグ・ステーキなどを食べさせる運動圏の思い出の場所として記憶されたセシールレストランは、2009年に店を閉めた。現在は韓定食の「タルケビ」が営業している。

旅程の4番目の目的地は、セシールレストラン跡に隣接している聖公会大聖堂だ。ここから6月抗争が本格的に始まった。国本の指導部は1987年6月10日、聖堂に潜入して鐘を打ち鳴らし、「パク・ジョン Chol 君の拷問致死歪曲・隠蔽糾弾と護憲撤廃国民大会」の開催を宣言した。聖堂側がミサの奉仕者だと言ったおかげで、警察を避けることができた。今でも聖公会大聖堂の後方には「6月民主抗争震源地」という碑石がある。

聖堂の向い側はソウル市庁前広場だ。延世大生イ・ハニョル^{ヨンセ}さんの葬式が行われた7月9日、ここに100万人を超える人々が集まった。聖公会大学のハン・ホング教授は、週刊「ハンギョレ21」に連載したコラム「歴史の話」で、当時の風景について「市庁前広場が満杯になったが、まだ葬列の後尾は新村^{シンチョン}周辺にいた。官製の動員集会を除けば、檀君以来の最大の人波が集まった」と書いた。ソウル特別市庁の西小門別館^{ソソムン}13階の展望台に上がって、その日の雰囲気想像をしてみることをお勧めする。聖公会大聖堂と徳寿宮、市庁が一目で見下ろせる。コーヒー一杯2千ウォンで楽しめるカフェもある。

イ・ハニョルの血染の服と靴がある記念館

最後に行って見たい所はイ・ハニョル記念館だ。イ・ハニョルは1987年6月9日、延世大の前で、デモ中に戦闘警察が撃った催涙弾を後頭部に受け、1カ月後に亡くなった。イ・ハニョルの死は、盧泰愚民主正義党大統領候補が直選制改憲要求を受け容れる「6・29宣言」に繋がった。ソウル麻浦区^{マポ}の老姑山洞^{ノゴサン}54-38にあるイ・ハニョル記念館には、彼が最後のデモの時に着ていた服と靴、頭から血を流して倒れた時に彼を包んだ延世大化学工学科の旗が展示されている。イ・ハニョルが息を引き取った日、警察が押しかけて突き付けた押収捜索検証令状も見ることができる。「押収する物：イ・ハニョルの遺体一体」という走り書きの文言が記されている。

ピョン・ジミン記者 (お問い合わせ japan@hani.co.kr)